昭和59年(1984年)12月10日　教皇様の敲　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

12 DECEMBER, 1984　毎月10日発行　第56号

教皇様の敲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
© 1984 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

みどり児——救い主なる神の愛

1　御父よ、人となり給い、あのベトレヘムの夜に私たちと共に住むために来てくださったみことばゆえに感謝いたします。

御父よ、みことばゆえに感謝いたします。御身は至聖なる本性すべてを永遠に御子にお与えになったから。

御父よ、みことばゆえに感謝いたします。御身は、御子のうちに、御身の証しをさせるために世の創造を永遠から決心なさったから。

御父よ、感謝いたします。御身は、みことばにおいて、「世の創造以前より」私たちを愛してくださったから。

御父よ、感謝いたします。御身は、愛する御子のうちに、全被造界を新たにし、人間を贖うことにしてくださったから。

永遠の御父よ、感謝いたします。ベトレヘムでのあの夜、神の誕生を実現し、人となり給うたみことばとその贖いの力が私たちに与えられたから。

2　御父よ、ダヴィドの聖なるぶどうの枝ゆえに感謝いたします。御身は、処女から生まれ秣おけに横たわる御子イエズスを通して、ダヴィドを示してくださったから。

ダヴィドのぶどうの枝、アブラハムの遺産において、御身の救いと永遠の契約を、この世の人間すべてにお与えになったから。

御父よ、御身の恩寵の遺産ゆえに感謝いたします。御身は私たちの恩寵を取り去ったりなさらず、かえって御子の誕生により、恩寵を新たにしてくださいました。御身は御子の十字架と復活により、世々にわたって罪のために失った神の子としての尊厳、永遠の御子の兄弟姉妹としての尊厳を取り戻すことのできるよう取り計らってくださいました。

聖なる御父よ、御身の聖なるみ名ゆえに感謝いたします。御身は、世の贖いによりふたたび私たちの心にみ名が花を咲かせるのを可能にしてくださいました。

3　御父よ、処女マリアにお与えになった母性ゆえに感謝いたします。聖母マリアは、ナザレトの大工ヨセフの保護のもと、貧しさのうちに御子をこの世にもたらしてくださいました。「ご自分の家に来られたが、その人々はうけいれなかった。」(ヨハネ1・11)

しかし、御子はご誕生のときから私たち全員をうけいれ、御父の永遠の愛、人々を救う愛、人の良心を罪から立ち上がらせる愛、によって私たち一人ひとりを抱擁してくださった。

御子のおかげで、和解と罪の赦しが与えられました。天の御父よ、秣おけに横たわる幼子ゆえに感謝いたします。御子のうちに、「救い主なる神の慈しみと人間への愛があらわれたから。」(ティト3・4)

永遠の御父よ、その愛ゆえに感謝いたします。一人ひとりの人間の歴史に幼子としてあらわれた、救い主なる神の愛ゆえに感謝いたします。

御身に感謝いたします。御子は、富んでおられたのに私たちのために貧しいものになってくださったから。(コリント②8・9参照)

すばらしい贖いのご計画、ベトレヘムでの誕生の夜はじめて示された、御身のご計画に心から感謝いたします。

4　全能の神よ、御身はすべてをみ名のために造り、人間に食べ物と飲み物をお与えになりました。

生まれたばかりの幼子の目で人々をごらんください。武器のために莫大な金が費やされているのに人々は飢えています。

パンを求めて泣く子を目のあたりにしながら何も言えずに苦しむ親たちを見てやってください。人類を脅威の雲のうちに閉じ込める精巧な武器、その武器にそそぎ込まれる費用のほんのわずかで子供たちの飢えをいやすことができるのに。

御父よ、戦争の犠牲となった人々の、平和を求める声に耳を傾けてください。彼らは、交渉や対話によって、現存する緊張緩和のために貢献できる人々の心に、語りかけています。

大勢の人々がたどる不安にみちた苦難の道に目をやってください。人々は、生きのびるため、進歩するため、向上するために、苦しんでいます。

やむなく家族から離れて生きる人々、利己主義と不忠実ゆえに分裂した家庭にいる人々、家もなく、国もなく、愛も、望みもない人々、このような人々の不安と苦しみをごらんください。

基本的な権利を踏みにじられ、よろこびも保障も奪われた人々をごらんください。

今日の世界をごらんください。世界には、希望と絶望、高貴な望みと卑劣は行為、高い理想と卑屈な妥協がうずまいています。

私たち一人ひとりと諸国民が、利己主義と傲慢と憎しみの壁を打ち倒し、遠きか近きかを問わず全ての人々に兄弟としての敬いを示すことができますように。全員、キリストにおける民、兄弟姉妹でありますから。

一人ひとりの心を動かし、困っている人々をよろこんで助け、その結果、贖い主キリストの恩寵に心をひらくことができますように。

貧しい人々、見放され、苦しむ人々に心をくだく教会をお助けください。

人々の心のなかで御身に対する信仰と隣人への親切を熱望する望みが、たえることなく強められますように。人々が、御身の現存と愛、御身の贖いと救いの力、御身の赦しと、み摂理への委託を、たえず求めつづけますように。

5　イエズス・キリスト、生ける神の御子、ベトレヘムでのあの夜、処女マリアからお生まれになったお方。

私たちの兄弟であり救い主であるイエズス・キリストよ、この世で初めて開く御目で、今日の世界が直面する難問をごらんください。

御身の誕生を機会に、地上の民と国家すべてを、御身との交わりに迎えてください。

御身の愛と慈悲を必要とする私たち男女、兄弟姉妹をどうか、御身との交わりに受け入れてください。(一九八三・十二・二十五)

主はおいでになる 世を贖う力を全てたずさえて

1 「番兵よ、夜の何時か。」(イザヤ21・11)

見よ、私は真夜中を告げる。今夜は東から西へ動く。夜は子午線に従い動く。東ではすでに夜、西ではこれから訪れる夜。

見よ、私は真夜中を告げる。夜が地球を横切る毎に、私は真夜中を告げる。

私、大いなる秘義の番兵、私、ローマの司教は、あらゆるところでクリスマスの真夜中を告げる。「新しい歌を主に歌え、全地よ、主に歌え。」(詩篇96(95)・1)

2 歌え、選ばれたのだから、全宇宙から選ばれたのだから。全宇宙も共に選ばれたから。地よ、歌え。「天は喜び地はおどり、海とそれに満ちるものは喜びいさみ、森の木々は声をあげんことを。」(詩篇96(95)・11～12)

地よ、歌え。汝は、神が人の体をとって生まれ給う所として選ばれたのだから。特異な真夜中に全地は集う。

全地よ、全力をあげて語れ。全被造界よ、自らの存在をもって語れ。人は口で語れ。

3 みよ、ここに語り手がいる。その名は福音史家ルカ。曰く、「マリアは月満ちて、初子を生んだので、布につつんでまぐさおけに子を横たえた。宿屋に部屋がなかったからである。」(ルカ2・6～7)

こうして神の御子はこの世に来られた。

マリアはヨセフの妻、ダヴィド家の子孫。ヨセフはナザレトの大工。

御子はベトレヘムでこの世にお入りになった。チェザル・アウグストゥスから全世界の人口調査を命じる詔勅がでたので、お二人はそこに来ておられたから。

4 以上は人間の語ること。主のみ使いも人間に語りかけた。天使は羊飼いたちに語りかける。夜の帳がベトレヘムを被い、「主の栄光があたりを照らすとき。」(ルカ2・9)

羊飼いたちは、「大いに恐れた。」(ルカ2・9)すると天使は言う、「恐れることはない。すべての人々のために大きな喜びを告げ知らせる。今日、ダヴィドの町で、あなたたちのために救い主が生まれ給うた。すなわち主キリストである。あなたたちは、布に包まれてまぐさおけに寝ているみどり児を見るだろう」と。(ルカ2・10～12)

人と天使が同じ出来事について語り、同じ場所を指し示す。

およそ人の口から出るはずのないことを、天使は伝える。ベトレヘムで、救い主、つまり注油された者がこの世においでになると。その御方は聖霊の力により人類を訪れ給う。ベトレヘムで世の救い主がお生まれになった。地を裁くであろう御方、正義に則って世を裁く御方がお生まれになるのだ。

「イエズスは私たちを罪からあがない、民をご自分のために浄めようとして、私たちのためにご自分を与えられた。」(ティト2・14)

その御方は私たちのためにご自分をお与えになる。これが彼の裁き。

5 「「番兵よ、夜の何時か。」見よ、私は真夜中を告げる、ベトレヘムの夜の深みから、地上に住まう人類の夜から。「すべての人間の救いのもととして神の恩寵が現われた」から。(ティト2・11)

恩寵とは何だろうか。恩寵とは神の好意。恩寵は秣おけに横たわる御子に集中している。

この御子は、永遠の御子、神の好意の御子、永遠の愛の御子である。御子は、マリアの子、人の子、正真正銘の人間の子。

御父の永遠の好意が人間に集中した。これこそ恩寵。「地上においては、神が愛される人々に平和。」(ルカ2・14)

人間に対する神の好意は、ベトレヘムでの夜、マリアの子によってこの地にもたらされた。

「神の恩寵が現われた。」(ティト2・11)ベトレヘムから、あらゆる時代の人々に、神の恩寵はひろがる。

恩寵とは何か。それは、栄光のはじまり。神が天上で所有なさる栄光のはじまりである。

そして、その栄光に、人々はキリストにおいて招かれた。すべてはベトレヘムの夜に始まったのであった。

6 だから、地よ、よろこべ。人の住まいである地よ、よろこべ。御子誕生の夜の輝きをふたたび受けいれよ。

輝きのまわりに集え。すべての被造物に、贖いのよろこびを告げよ。全世界に、世の贖いへの展望を告げ知らせよ。

「野とそれに満ちるものは喜びいさみ、森の木々には声をあげんことを、主のみ前にあって。」(詩篇96(95)・12～13)

見よ、主はおいでになる。

見よ、彼はエンマヌエル、すでに私たちの間にいます。世を贖う力を全てたずさえて。アレルヤ。

(一九八三・十二・二十四)

人類の福音化

福音には、あらゆる文化に浸透し、それらを高揚、浄化する力が備わっている

表題の課題には主に二つの補完的な面があり、これら二面は教会が活動する二つの分野に関係しています。その一つは、諸文化の福音化であり、もう一つは、人間の弁護と文化の発展です。

教会は、全ての人々のために全てとならねばなりません。現存する諸文化に福音が浸透するには、長い土着過程が必要です。教会はこの過程を促進させることによって、人々が信仰の領域に到着し、強い欲望がかなえられるのを助けます。みなさん方の祖先である韓国の初代信者は、この点をはっきりと見通しておられました。彼らは、豊かな人間性を熱心に追求することによってキリストを知るに至り、福音が人々の考え方と情緒面にしっかりと根をはるよう模範的な努力をされました。

国民性を守りつつ文化交流と理解を目指した彼らの態度にならい、私たちも様々な文化を互いに近づけるべく尽力しなければなりません。それはとりもなおさず、個々の文化が親しい関係に入り互いに一層ゆたかになるためであり、その結果、普遍的な価値がすべての文化の遺産となるためであります。こういう意味からみると、諸文化間の「かけ橋」としてのみなさんの役割がすこぶる大切なことは明らかです。ところで、その役割を一層効果的に果たそうとするならば、みなさんが、韓国人としての独自性を維持し、かつ、諸文化との対話のなかに、福音のもつ救いの力を加えなければならないでしょう。福音には、あらゆる文化に浸透し、それらを高揚、浄化する力が備わっていると考えるからです。

しかし、文化を豊かにする方法はほかにも

あります。多数の国民が長い年月を経て得た結実、科学技術の進歩、社会制度の発達、芸術の進展、これらはすべて人間の本性を明らかにしてくれます。いずれも真理への道を開いてくれるだけでなく、神の神秘をより深く理解するのにも大いに役立ちます。宇宙科学、生命科学、情報処理、心理学（…）その他は、人間の真価をみせるのに役に立つというわけです。実に、人間が生み出した素晴らしい業績は神の偉大さを示すと共に、神のご計画の開花であると言えるから、また、いずれをとっても、神の創造のみわざ、救いのみわざの意味を浮き彫りにしてくれるからです。

こう考えてみれば、福音と文化の対立する状態がいかに危険であるかがわかるのではないでしょうか。パウロ六世教皇の言葉を再考するのも有益かと思います。「福音と文化の分裂は、以前にそうであったように、現代においても一つの悲劇である。」

神がお与えになった力と、仕事に従事する人間の美を、賞賛し歓迎しなければなりません。とは言え、人間に与えられた力が強力なものであるゆえ、その力を使う人間は、事物を明晰に識別する力を備えていなければなりません。私たちに賦与された力は、驚異を生み出すこともできれば、使い方によっては自らを破壊することにもなってしまいますから。

次のことを忘れないでおきたいものです。福音は、神の似姿としての自分自身を自分自身のために愛せよ、と命じている。すなわち、私たちのために御独り子をつかわす程の深い愛と慈しみをもつ御父を思うならば、人間はそれ自身、敬われ、たたえられ、尊厳を認められるべきであることをはっきりさせるために。人間を道具とみなすことは決して許されません。たった一人の人でさえ、軽蔑され酷使されるようなことがあれば、それはすなわち、創造主を軽蔑し酷使することにほかならないのです。(…)(韓国訪問時の話)

黙想のしおり

今月号から数回にわたり、黙想や念禱の糧として、教皇様の言葉をテーマ別に列記します。たまたま編集部手持ちのメモの一部であって教皇様の言葉すべてをもとにしたものではありませんが、お役に立てていただければ幸いです。

待降節

待降節は収穫を待つ時期に似ている。農夫は一年、あるいは数ヵ月稔りを待つ。ところで人間は生命の稔りを一生の間待ち続ける。この世の収穫は稔り毎に繰り返される、人間の必要をみたすために。

人間の生命の収穫は、赤裸々な真実の姿で、神、そして審判者であるキリストのみ前に立つまで待たねばならない。

待降節中は、教会の教えに従いつつ、準備をしなければならない。いと潔き聖母の胎内で人となり給うた神の御子の秘義、永遠の神秘をよく黙想し、改心の勧めに応じるために。

ご降誕

主のご降誕を最初に知ったのは羊飼いたちであった。今では世界中で何百万何千万という人々がこれを知っている。ベトレヘムの夜に輝いた光は大勢の人々の心に届いた。しかしまだ暗闇は残っており、ときにはこの闇がますます深まるようにさえ見える……。

キリストのしもべ、神の秘義の管理者である私は、この夜の光に与るみなさんと祈るほかはない。この光が世界のすみずみに迄届くように、そしてすべての心に入口がみつかるように。消えてしまったかのように見えるところに、この光が戻るように。

ベトレヘムの馬小屋で永遠に生まれる御子の誕生について黙想しよう。御父から永遠に生まれた御方、神よりの神、光よりの光が、どうして処女から生まれるのだろうか。御子が処女マリアから生まれたとき、宿に部屋がなかったのはなぜだろうか。なぜ、人々は御子を受け入れなかったのか。なぜ、世界は彼を知らなかったのだろうか。

騒がしかった一年を振り返り、色々と矛盾の多い人間の歴史のうちにも、神はつねに現存し給うことを思いだそう。

人間を創造するに当たり、知性と自由をお与えになった神は、歴史のなかに壮大な峰々と悲惨な深淵とがちりばめられているよう望まれた。しかし、人間を見捨てたわけではない。クリスマスは私たちが全能の神に愛されていることを保証してくれる。

キリスト

愛するみなさん、ありったけの力を集中させてキリストをながめましょう。(…) 私たちの罪のために十字架につけられ、私たちを救うために復活されたキリスト、間違いなく全ての中心となる御方「私が地上からあげられるときすべてを私のもとに引き寄せよう」とおおせになった御方（ヨハネ12・32)、その御方をながめてください。

君たち一人ひとりに言いたい「私について来なさい」と招くキリストの呼びかけに注目せよと。（主は、)私の道を歩め、私のかたわらにたて、私の愛にとどまれ！とおおせになる。選ぶべき道が与えられている。キリストとその生き方、主の愛の掟を君たちは選ぶことができるのだ。

最も執着を感じるものよりも上にキリストを置かないなら、主のように十字架をになう覚悟をしていないなら、物質的なものは相対的であることを知らないなら、キリストの弟子ではありえない。

私たちの時代の要請に従って完全な人間学を作り上げるには、キリスト論こそ基礎であり、第一条件となるのではなかろうか。事実、キリストのみが（人間自身に人間とは何者かを完全に示してくださる。）これを忘れてはならない。

キリストなしには人間を深く理解することなどできない。キリストなしに、人間が自らを理解することはできない。人間とは、その尊厳とは、人間の召しだしとは、その目的とは、これらの問いに答えようとするならば、どうしてもキリストご自身について考えてみなければならない。

聖霊

聖霊は霊魂の客人、教会全体を生かす御方である。使徒信経ではこのような御働きが、水や息吹きや火、命の源、生かす力、浄めの源、といった活き活きとした表現で浮き彫りにされている。

聖霊は、心のなかで光のようなはたらきをされる。そのおかげで、人はみずからの罪を認めることができる。人が自己の過ちに目を閉じている間は回心など望めない。聖霊は、良心を照らし、神のまなざしをそそいで、罪人が犯したあやまちに目を開くよう助けてくださる。

不変の教え

結婚の倫理

回勅『フマーネ・ヴィテ』は夫婦生活に関する倫理規準を思い起こさせるだけでなく、新しい事情に直面するこの規準を再確認させてくれました。パウロ六世教皇は、回勅（1968年）によって真正な教導職の教えを提示したわけですが、そうするとき、第二バチカン公会議の世界憲章（1965年）の権威ある教えを眼前においていました。

回勅は公会議の教えと同一線上にあるだけでなく、とくに「夫婦愛と生命の尊重」という問題に関しては、公会議の教えの発展であり、完成であります。この問題について世界憲章は次のように教えています。「教会は生命の伝達に関する神の掟と真正な夫婦愛を励ます神の掟との間に、真の矛盾があるはずはないことを思い出させる。」（『世界憲章』51）

倫理規準は理性に反しない

第二バチカン公会議の司牧憲章は、規準という面からみて、「真に矛盾があるはずはない」と教えます。パウロ六世はこの点を確認すると同時に光を与え、倫理規準が理性に反しないことを示してくれました。

しかし『フマーネ・ヴィテ』は、規準面での「矛盾なし」という点よりは、「生命の伝達と真正な夫婦愛との間の不可分な関係」を、夫婦行為の二つの意義、つまり、「夫婦の一致の意義と産出の意義」という面から強調することに力を入れています。

ここでしばらく規準そのものを分析したいと思いますが、『現代世界憲章』、『フマーネ・ヴィテ』双方共、どちらかと言えば、少なくとも間接的に司牧的考察をしています。事実、『現代世界憲章』は司牧憲章であり、パウロ六世の回勅も、教理的な文書という面を有しながらも司牧を目的としています。現代人の質問に答えるという意図のもとに書かれているからです。人口問題に関すること、従って、世界の人口増加に関わる社会・政治的性格の問題であります。いずれも個別の学問から生じた問題であると同時に、現代の倫理学者（神学・倫理学者）の問題でもあると言えましょう。それらはすでに公会議の憲章の中心点であった上に、再び回勅において詳しく検討されたものであり、とくに夫婦が提起した事柄です。回勅には次のような説明があります。

「今日の生活条件と夫婦間の和合と忠実について夫婦関係のもつ意味を考慮するならば、いままでの倫理原則を、とくにそれが大きな犠牲、時には英雄的な犠牲なしには守れないと思われる場合には、再検討するのが適当ではないでしょうか。」（『フマーネ・ヴィテ』3）

司牧面からの論証

回勅のこれらの言葉を読むと、現代の人々の有する重大な諸問題のすべてに対処せんとする心遣いがうかがわれます。問題の今日性をみても、充分に検討し、深く考慮した上で返答が与えられねばならないことはあきらかです。従って、規準が深く吟味されていることを期待して当然と思われると共に、現実の人間生活、とくに最初に述べたような問題提起をする人々に関係のある、司牧面にかなり重きがおかれるよう望むのも当然なことでしょう。

パウロ六世はこのような人々のことをたえず念頭においていました。その証拠に、回勅には次のような記述が見られます。「神のおきてそのものを公布している、適正な産児調整に関する教えは、疑いもなく、多くの人々にとっては困難であり、むしろ全く守ることが不可能であると思われるでしょう。たしかに、ひじょうに貴重で有益なことがらの例にもれず、このおきては、個人にも、家庭にも、また社会にも確固とした態度と多くの努力とを要請するものであります。しかもそれは、人間の善意を支え力づける神の恩寵の助けなしには守ることができません。しかし、思慮ある人々にとっては、このような努力は人間の尊厳を高め、人間社会に恩恵をもたらすものであることが理解できるはずであります。」（『フマーネ・ヴィテ』20）

理解のための原則

ここでは、規準に矛盾はないという点についてよりも、「神法を守る可能性」があるという点、つまり、少なくとも間接的に司牧面が強調されています。神法は守り得る、というのは、直接、法の本質に属することであり、その意味ではすでに、規準に矛盾はないという大きな枠内におかれているわけです。それにもかかわらず、可能性、つまり、「法の遵守の可能性」と言えば、それは実践と司牧に属する事柄でもあります。先に引用した箇所を見ると、前任者がこの視点から話していることがわかります。

ここで次のような結論をひきだすことができます。一つには、聖書全体の教え、いわゆる「身体の神学」が、間接的にではあっても『フマーネ・ヴィテ』に含まれた教えを確認していること、もう一つには、いま問題として取り上げている事柄の実践的かつ司牧的な面をより深く考察するのに役立つこと、この二点です。ところで、聖パウロの、たとえばコリント人への書簡は、初代信者たちの道徳についての手引書と言えるのではないでしょうか。そこには、回勅『フマーネ・ヴィテ』が扱うような問題に直面したときどうしても必要な「理解のためのルール」を見つけることができます。

万一、公会議と回勅が実生活で出会うもろもろの困難を考慮していないと考える人がいるとすれば、その人はこれらの文書が誕生した背景には司牧的配慮があったことを、全くもって理解していないことになります。司牧的配慮とは、人間にとって本物の善を求めること、神が人格に刻み込んでくださった諸価値を奨励することです。それはすなわち、人間の愛について神がどのような計画をお立てになったかを発見するために、「理解のためのルール」を守ることなのです。そのとき、人間にとってただひとつほんものの善とは神の計画に従うことであると確信していなければなりません。

次のように言うことができるでしょう。前述の「理解のためのルール」を考えたからこそ、公会議は「夫婦愛と生命の尊重」について触れ、また回勅『フマーネ・ヴィテ』は、良心を拘束する力のある倫理規準を想起させるだけでなく、「神法を守る可能性」についても強い関心を寄せて記述している、と。

『フマーネ・ヴィテ』について考察を加えてきましたが、これで、次のテーマ、「良心的産児」（責任ある親）について考える下地ができたのではないかと思われます。

（一般謁見　一九八四・七・二十五）

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393